紹介

国史論集　京都大学文学部読史会創立五十周年記念

読史会が今年で半世紀の齢を重ねた。この論集は、半世紀の歩みのモニュメントとして出版されたものである。収載された論文の一つ一つは読史会の顔に刻まれたしわである。しかしそれは老衰者のそれではない。顔のしわというよりは、頭脳に――働きのよい頭脳ほどそれが多いという――生じたひだというべきであろう。

この論集に収載された論文の一つ一つの内容について立入った紹介は差控えて、次に目次を紹介するにとどめるが、収載論文は百十一篇、執筆者は読史会五十年の歩みのすべてを共にされた人々から、現在読史会の活動の動脈となっている少壮の人々に及ぶ。一冊には収めきれず二冊によって構成されている。聞く所によると、この論集が企画された時は六十篇位が予定されていたとのことだが、予定の二倍近くの論文を聚められた関係者の努力は言うまでもなく、それ以上に、半世紀の歩みを振返り、更に新しい発展へのモニュメントを打建てようとされた会員一人一人の熱意を多としなければなるまい。心からなる祝意と敬意を表すると共に、このような会員諸氏の熱と力とに支えられて、読史会が更に力強い歩みを続けるであろうことを期待して居る次第である。

「うつりかわりの美」と日本文化（序説）
――日本の歴史思考を支えているもの――　西田直二郎
邪馬台国問題の解決のために　牧　健二
大和国家と皇族将軍　上田　正昭
ヤマトタケル伝説と伊勢神宮　直木孝次郎
所謂任那日本府について　井上　秀雄
聖徳太子の苦悩　田村　円澄
蘇我氏の滅亡をめぐって　肥後　和男
政治的クラの成立　八木　充
古代社会の変革をもたらした氏姓制度　石沢　澈
カバネ「首（オビト）」について
――特に天平十一年出雲国大税賑給歴名帳を中心として――　吉田　晶
品部と雑戸の差異について　福尾猛市郎
夫婦同籍・別籍について　赤松　俊秀
籍帳備考二題　岸　俊男
「殷富・富豪之輩」の一考察　門脇　禎二
蝦夷の人口に関する一考察　横田　健一
上代牧馬の経済研究　佐藤　虎雄
上古初期の仿製鏡　梅原　末治
南島の古代文化と日本先史時代の農耕　国分　直一
我国の神話に関する一つの新しい見方について
――土俗人種学的一管見――　鈴木　譲
姨神考　田中　勝蔵
山と川と田の信仰　吉川　正倫
古代人の「丹（に）の色」に関する情緒（ナンチメイント）について　池田　源太
みそぎ
――ナニワにおける皇室の儀礼――　山根徳太郎
賀茂上下両社の鎮座をめぐりて　座田　司氏
古代の虹に関する史的考察　高瀬　重雄
草創期室生寺をめぐる僧侶の動向　薗田　香融
祇園御霊会
――その成立の意義――　柴田　実
御霊信仰の発生　岩城　隆利
御霊会の成立と初期平安京の住民　高取　正男
天台修験道の成立　村山　修一
世継翁の登場
――歴史と伝説と文学――　林屋辰三郎
藤原基実の花押
――阿波国竹原野御庄八梓神社長寛元年の二品家政所下文について――　多田　伝三

鳥獣戯画について　源　豊宗
中世初期農業の一特質　戸田　芳実
―見作と年荒をめぐって―
平安末期の畿内の「領主」について　泉谷　康夫
東大寺燈油料荘園としての大和国高殿庄について　平岡　定海
遠江国質侶荘と待賢門院御願円勝寺　堀池　春峰
鎮西島津庄の寄郡について　工藤　敬一
―遠隔地の寄進地系庄園に関する一考察―
連署制の成立　上横手雅敬
備中の国衙について　藤井　駿
鎌倉末期周防国衙の一動向　藤本　進
中世漁村の成立過程　村井　康彦
―若狭国遠敷郡多烏・汲部両浦の場合―
中世の若狭網場漁業をめぐる二・三の問題
―その成立と網について―　楠瀬　勝
東寺寺院経済に関する一考察　上島　有
―特に最勝光院領庄園について―
東寺領大和国平野殿荘　井上　良信
精神生活より見たる地方武士団の展開
―熱田大宮司家の消長―　田中　善一
赤松氏再興をめぐる二・三の問題　水野恭一郎
山城国一揆に関する一考察　熱田　公
結縁交名の二万名　中村　直勝
中世初頭における教団組織の結集について　田中　稔
法然上人絵伝攷　井川　定慶
親鸞の家族と越後　梅原　隆章
中世における国家観の一形態　藤井　学
―日蓮の道理と釈尊御領を中心に―
仏法領について　黒田　俊雄
畿内の真宗教団の基盤について　石田　善人
中世における播磨国清水寺　東郷　松郎
梅屋宗香と乗福寺本鷗庵遺稿等について　桜井　景雄

――以上　第一冊――　松山　宏

都市の地域差
平戸英国商館の内部事情について　山田　源行
白根金山　小薬田　淳
―東北地方金山経営の一形態―
初期幕領における貢租　朝尾　直弘
徳川時代の石盛の一問題　柏倉　亮吉
加賀藩十村役の起源　米沢　元健
加賀藩隠田考　若林喜三郎
家光政権の文治性について　熊田　重邦
土佐藩「寛文の改替」の一考察　石躍　胤央
近世初期の大和の綿作について　朝倉　弘
―中部大和の場合―
元禄期河内一綿作農村の発展　高尾　一彦
―経営的側面よりみた考察―
元禄・享保期近江商人の一経営　脇田　修
―日野・正野玄三家「惣勘定仕上帳」について―
吉宗の継統とそれをめぐる幕府政局　宅間　博
丹波における郷士層の危機　秋山　国三
―馬路村両苗郷士を中心として―
地主制形成期の小作地経営について　高沢　裕一
近世後期河内南部の村方騒動　福島　雅蔵
近世名古屋の一豪商の商業経営　日置弥三郎
近世・大和王龍寺の祠堂銀について　小野恵美男
幕末における現物経済と貨幣経済
―長州藩物産統制の問題によせて―　芝原　拓自
慶応二年大坂周辺打毀しについて　酒井　一
大徳寺をめぐる商人たち　三浦　圭一
狩野派の家系と徒弟制について　土田　寛
―狩野派における封建制の諸問題―
神道における女性論の性格　船津　勝雄
寺元について　平山敏治郎
太宰春台の経済思想　今中　寛司

三宅石庵とその思想 ―大阪懐徳堂史の一齣― 大月 明
中井竹山の日本史研究について 藤 直幹
海保青陵の思想 埜上 衛
原始謾筆風土年表について 古田 良一
「御蔭参」私考 梅田 幹次
村の民俗と寺の経済 ―ある無名村落寺院の場合― 竹田 聽洲
伊豆宇佐美の鳥刺踊 田中 勝雄
横浜居留地と上海租界 秋本 益利
秩禄処分と七分利付外債募集 杉井 六郎
明治初年における旧鳥取藩士族の動向について 徳永 職男
明治初期鳥取県の結社の成立と自由党勢力について 松尾 茂
明治一四年の政変と佐々木高行 梅溪 昇
自由党と朝鮮問題 ―『自由新聞』社説を通じて― 中塚 明
我が国警察の歴史的背景 戸田 秀典
機械製絲勃興期における一製絲ブルジョアの生涯 ―山梨県勧業製絲場建設者名取雅樹について― 有泉 貞夫
織物消費税廃止運動について 山本 四郎
大正前期の普通選挙法獲得運動 ―普通選挙同盟会を中心に― 松尾 尊兊
一九二二年の営業税反対運動 ―大正デモクラシー運動期の階級構造にかんする一試論― 江口 圭一
昭和初期の中日関係 ―北伐への干渉― 臼井 勝美
歴史社会における身分制に関する覚え書 藤谷 俊雄
明治維新以前のヨーロッパ政治思想 佐藤 利夫
加藤弘之における啓蒙思想の論理 ―『国体新論』をめぐって― 平林 一
中江兆民とルソー 岩井 忠熊
大井憲太郎の国権主義 山口 光朔
横井時雄の信仰について ―明治二十三・四年を中心に― 宮本 又久
西欧における日本美術の蒐集について 中村 二柄
西田文化史学の史学史的意義 酒井 忠雄
文芸学と文化史学 石田 一良
文化史管見 三品 彰英
―以上 第二冊―

（A5判一八二八頁 昭和三四年一一月 京都大学文学部読史会刊 頒価三、〇〇〇円）

（横山 裕男）

日本史研究会史料研究部会編 類聚三代格索引

類聚三代格の索引は早くから要望されながら、その作成には種々の困難を伴うところから、長い間実現しないできた。それが今回、門脇禎二氏を中心とする日本史研究会史料研究部会の手によって作成された。

本書は、事項別分類による事項別索引と、アイウエオ順による一般項目索引の二編よりなっている。第一編事項別索引は、官制（神祇官、太政官、省、寮、司、職、府、弾正台、大宰府、官使・令外官）、位階、僧官・僧位、人名（皇族、諸氏人名、僧侶、外国人名）、神・神社、寺院（寺院、外国寺院）、地名（国、郡、郷、一般、条坊・条里）に分類されている。第二編一般項目索引は、総頁数（二二八頁）の約三分の二を占めているが、このことからも推察されるように、詳細に項目が拾われており、私達の要求を充分満たしてくれる。

本書の特色は、なんといっても、重要な項目に関連項目が詳細にとりまとめられ付記されていることであろう。例えば、第一編、官制、令外官の「観察使」の項目には、各道観